HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	オホーツク海北岸地域とサハリンの交通路 : 櫛目文土器の出土と関連して
Author(s)	菊池, 俊彦
Citation	北海道大学総合博物館研究報告, 6, 18-26
Issue Date	2013-03
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/52573
Type	bulletin (article)
Note	2013年7月1日改訂
File Information	v. 6_2.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北海道大学総合博物館研究報告 **6**: 18–26. 2013 年 3 月
Bulletin of the Hokkaido University Museum. **6**: 18–26. March, 2013.

オホーツク海北岸地域とサハリンの交通路
― 櫛目文土器の出土と関連して―

菊池俊彦 *（北海道大学・名誉教授）

Trading routes between the Northern Okhotsk Sea region and Sakhalin with relation to the subject of the excavated comb-patterned pottery

Toshihiko Kikuchi* (Professor emeritus at Hokkaido University)

Abstract: Incision-patterned pottery was excavated at many archaeological sites from the Okhotsk culture dated 300 to 1300 A.D. They are similar to incision-patterned pottery excavated at numerous archaeological sites from the Tokarev culture dated 700 B.C. to 200 A.D. and the Ancient Koryak culture dated 500 to 1700 A.D., on the northern coastal area facing the Sea of Okhotsk. Such resemblances of incision-patterned potteries indicate that these ancient inhabitant groups of Sakhalin and the northern coastal area of the Sea of Okhotsk had some form of contact with each other.

Susuya-type pottery peculiar to Sakhalin contains comb patterns. Pottery with comb-patterned ornamentation was excavated at not only Tokarev culture archaeological sites but also at archaeological sites of the Early Iron Age in the northwestern coastal area. In Sakhalin, however, details of the culture with comb-patterned pottery remain unknown.

Recent publications reveal that comb-patterned pottery has been excavated at many archaeological sites in Northern Sakhalin and that such pottery belonged to the Nabil' culture dated 800 to 300 B.C. and to the Pil'tun culture dated 1000 to 400 B.C., both of the Early Iron Age (cf. Fig. 2). These finds clarified the fact that the comb-patterned pottery were from the Nabil' and Pil'tun cultures in Northern Sakhalin (Fig. 3: 1, 15). Moreover, it is estimated that the comb-patterned pottery of the Susuya-type pottery (Fig. 3: 18, 19 and Fig. 5) appeared in Southern Sakhalin through the influence of Nabil' culture.

At the Kukhtuj VII archaeological site of the Early Iron Age on the northwestern seacoast of the Okhotsk, comb-patterned pottery similar to those characteristic of the Nabil' and Pil'tun cultures was excavated (Fig. 7: 1, 8, and 9). The age of the Kukhtuj VII site is estimated to be from 600 to 500 B.C.

Comb-patterned pottery was also excavated at the Ujka site of the Early Iron Age on the northern seacoast of the Okhotsk (Fig. 8: 1, 2, 13, 14, 16, 19–26, 30–32). The age of the Ujka site is estimated to be from 1 to 500 A.D.

At the Spafar'ev archaeological site of the Tokarev culture dated 700 BC to 200 A.D. on the northern seacoast of the Okhotsk, comb-patterned pottery similar to those characteristic of the Nabil' and Pil'tun cultures was excavated (Fig. 10: 2–8). The age of the Spafar'ev site is estimated to be between 300 B.C. and 100 A.D.

The comb-patterned potteries excavated at the Ujka and Kukhtyi VII sites on the northwestern coast of the Sea of Okhotsk and the Spafar'ev site on the northern coast of the Sea of Okhotsk resemble the comb-patterned pottery excavated at many sites of the Nabil' and the Pil'tun cultures. The ages of these sites are not coincidental, being within the range of the Tokarev culture period dated 700 B.C. to 100 A.D. Therefore, it is supposed that these comb-patterned potteries at the Ujka, Kukhtuj VII, and Spafar'ev sites appeared by means of contact and mingling of inhabitants in North Sakhalin, on the northwestern and northern seacoasts of the Okhotsk.

A route for traffic was most likely opened by means of contact by peoples of the Nabil' and the Pil'tun cultures in Northern Sakhalin, by peoples of the Early Iron Age on the northwestern seacoast of the Okhotsk, and by those of the Tokarev culture on the northern seacoast of the Okhotsk; hence, this trading route provided a way for the comb-patterned pottery to be spread from Northern Sakhalin to the northwestern and northern seacoasts of the Okhotsk.

Keywords: comb-patterned pottery, the Early Iron Age, the Nabil' culture, Sakhalin, the Tokarev culture

* Corresponding author. email: kikuchi-t@violet.plala.or.jp
© 2013 Hokkaido University Museum

はじめに

サハリンのオホーツク文化の遺跡と，オホーツク海北岸のトカレフ文化および古コリャーク文化の遺跡から，両者に共通して刻文の土器が出土している。そのことはサハリンとその北のオホーツク海北岸地域の間に何らかの形で相互の接触があった可能性を示している（菊池 1995: 389–394，菊池 2004: 69–72）。またサハリンに固有の鈴谷式土器には櫛目文の土器が含まれているが，そのような櫛目文の土器はトカレフ文化の遺跡から出土しているほか，オホーツク海北西岸の初期鉄器時代の遺跡からも出土している（Лебединцев 1990: 116–123, 134–137，菊池 1995: 386–392，菊池 2004: 28, 32）。しかしながらサハリンの櫛目文の土器はどのような文化に属しているのか，という問題はまだ解明されていない。また鈴谷式土器はオホーツク文化に含まれるのか，という問題もまだ確定されていない。そのような問題が未解決のままである要因は櫛目文の土器の出土状況が明確に判明している遺跡が少ないためである。

そうした中で，2000 年代になって，サハリン北部の遺跡から櫛目文土器の出土例が相継いで報告されるようになり，近年，それらは初期鉄器時代のナビリ文化やピリトゥン文化に属することが発表されている（Василевский *et al.* 2005，Василевский 2008，ヴァシレフスキーほか 2009）。

こうしてサハリン北部では，ナビリ文化やピリトゥン文化の遺跡から櫛目文土器が出土することが解明された。またサハリン南部の鈴谷式土器に含められていた櫛目文の土器もナビリ文化の影響で出現した可能性が考えられている（Василевский 2008: 180，菊池 2012: 61）。

新たに判明したこのような状況から , ナビリ文化やピリトゥン文化の遺跡出土の櫛目文土器とオホーツク海北西岸の初期鉄器時代の遺跡出土の櫛目文土器およびオホーツク海北岸のトカレフ文化の遺跡出土の櫛目文土器は，それらが何らかの形で相互に接触があって生じた可能性が考えられるようになった。このような櫛目文土器の出土は，ナビリ文化やピリトゥン文化の時代に，サハリンからオホーツク海北西岸およびオホーツク海北岸に至る交通路が拓かれて，サハリンとオホーツク海北西岸および北岸地域の間に文化的交流があったことを示しているのではないだろうか。小論はこの問題について検討するものである。

1．サハリン北部の初期鉄器時代の遺跡

サハリン北部の古代文化の様相は長い間，ほとんど知られていなかった。1990 年代末にサハリン北部のオハの天然ガスを，サハリン東部を縦断して南のコルサコフ港まで輸送するパイプラインの敷設が計画され，その工事に先立って，遺跡の分布調査と緊急発掘調査が 1998 年から開始された。その結果，サハリン北部において新石器時代，初期鉄器時代，中世の多数の遺跡が発見され，2007 年までに多くの住居址や墓が発掘された（図 1 参照）（Василевский *et al.* 2005: 49–55, ヴァシレフスキーほか 2009: 49,51–56）。

とりわけ，サハリン北部の初期鉄器時代の遺跡が発見され，ナビリ文化（紀元前 8 ～前 3 世紀）とピリトゥン文化（紀元前 10 ～前 4 世紀）が新たに設定された。サハリン北部を分布圏とするナビリ文化（図 2 参照）の代表的な遺跡はチャイヴォ 1 遺跡である。ナビリ文化の住居址は四角形や五角形や六角形で，土器は尖底，文様は櫛目文が特徴的である（図 3：15）。またサハリン北部の北半部には，ほぼ同時期にピリトゥン文化があり，代表的な遺跡はカシュカレバグシュ 2 遺跡である。ピリトゥン文化の住居址は四角形や五角形で，土器は尖底や丸底，文様は突瘤文や櫛目文が特徴的である（図 3: 1）（Василевский 2008: 177–181，菊池 2012: 56–60）。

ナビリ文化の土器はサハリン南部のススヤ文化（紀元前 5 ～後 5 世紀）の土器に対応するという。ススヤ文化はサハリン南部を分布圏として，その土器は尖底や丸底や平底で，文様は縄目文（図 3：16・17）と櫛目文（図 3：18・19）を特徴としている。またピリトゥン文化は年代としてはサハリン南部のアニワ文化（紀元前 8 ～前 3 世紀）と共存していたという。アニワ文化はサハリン南端部を分布圏として，その土器は口縁部に突瘤文と縄目文の文様があり，胴部は縄文によって覆われている（図 3: 3・5・7・9）。このような土器は北海道の続縄文文化の土器と共通しており，アニワ文

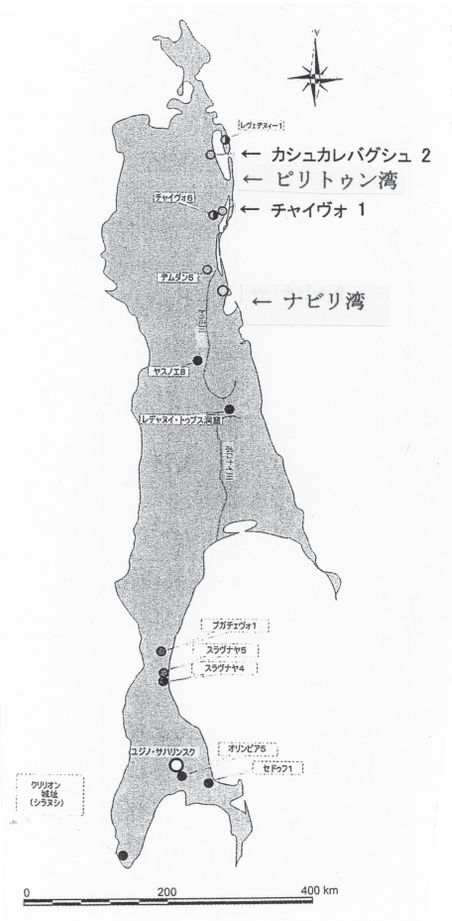

図 1 2007 年までに調査された遺跡
（ヴァシレフスキーほか 2009）

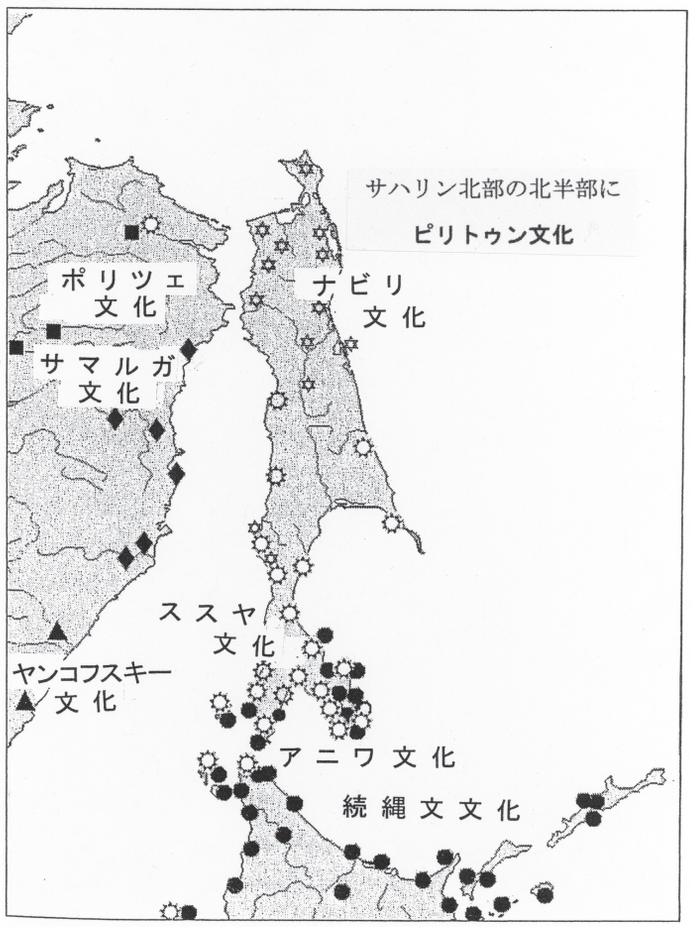

図 2 サハリンと周辺地域の初期鉄器時代の諸文化
（Василевский 2008）

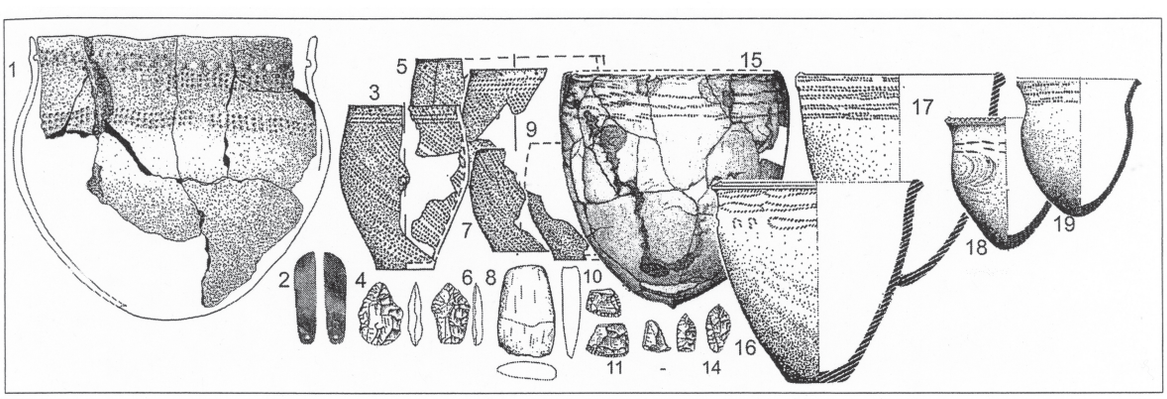

図 3 初期鉄器時代のサハリンの諸文化の土器・石器（紀元前 10 ～前 1 世紀） (Василевский 2008)
1・2　ピリトゥン文化　　3 ～ 14　アニワ文化　　15　ナビリ文化　　16 ～ 19　ススヤ文化

化には北海道の続縄文文化の人たちがサハリンに進出したことが反映されていると考えられている（Василевский 2008: 176–179）。

ナビリ文化の住居址には地下の連結用通路でつながった 2 室型式の住居址があり，チャイヴォ 1 遺跡のそのような住居址（図 4）から櫛目文のナビリ式土器（図 3: 15）が出土した（Василевский *et al.*

2005: 55–56)。このような櫛目文の土器は 1930 年代に新岡武彦によってサハリン中部の西海岸にある恵須取（えすとる）町〔現ウグレゴールスク市〕の恵須取川河口の遺跡から発見されている（図 5）（新岡 1940: 26–27, 新岡 1977: 70–71, 菊池 2012: 57–58）。新岡武彦はこの土器を恵須取式土器と命名した（新岡 1970: 6–7，新岡 1977: 167）。近年，北サハリンの考古学調査によって発見されたナビリ式土器はこの恵須取式土器に対比することができるという（Василевский *et al.* 2005: 55）。

ピリトゥン文化の遺跡はサハリン北部のうち，その北半部のピリトゥン湾とチャイヴォ湾の沿岸に分布している。その規範的な遺跡はピリトゥン湾西岸にあるカシュカレバグシュ 2 遺跡である。そこでは典型的な五角形や，四角形あるいは五角形に近い形状の住居址が発掘された（図 6）。それらの住居址からは突瘤文と櫛目文が複合されている土器（図 3: 1）や櫛目文の土器（図 6）が出土している（Василевский *et al.* 2005: 51–53）。

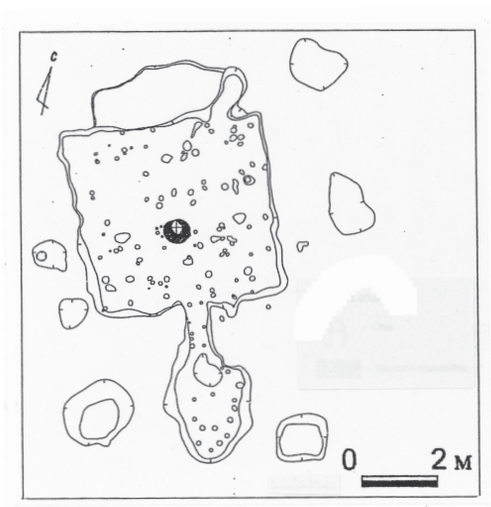

図 4　チャイヴォ 1 遺跡の住居址
（Василевский *et al.* 2005）

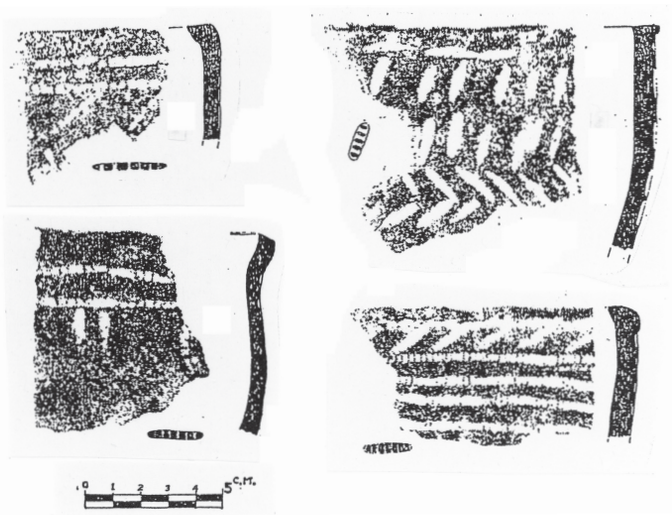

図 5　恵須取川口第 3 号遺跡の櫛目文土器（新岡 1940）

2. オホーツク海北西岸の初期鉄器時代の遺跡

オホーツク海の北西岸では 1970 年代末～ 1980 年代初めに，初期鉄器時代の遺跡が調査されている（Лебединцев 1990: 131–167，菊池 2004: 28–33）。オホーツク市に近いオホーツク海北西岸の初期鉄器時代の遺跡であるクフトゥイⅦ遺跡から，サハリン北部のナビリ文化やピリトゥン文化に特徴的な櫛目文の土器と同様の櫛目文の土器が出土している（図 7: 1・8・9）（Лебединцев 1990: 131–137，菊池 2004: 28）。クフトゥイⅦ遺跡の文化層から得られた木炭の放射性炭素による年代測定値は 2700 ± 100 年，および 2650 ± 100 年であり，このデータに依拠して遺跡の年代は紀元前 1000 年紀中葉と推測されている（Лебединцев 1990: 137，菊池 2004: 29）。すなわちクフトゥイⅦ遺跡の年代は紀元前 6 ～ 5 世紀と推定されている。なお，このほかにクフトゥイⅦ遺跡の放射性炭素による年代測定値として 2350 ± 200 年と 1550 ± 100 年というデータが得られたと記述されているが，このデータに関する詳細な記述はない（Лебединцев 1990: 179，菊池 2004: 29）。

同様にオホーツク海北西岸の初期鉄器時代の遺跡であるウイカ遺跡からも櫛目文の土器が出土している（図 8：1・2・13・14・16・19 ～ 26・30 ～ 32）（Лебединцев 1990: 157-161，菊池 2004: 32-33）。ウイカ遺跡では放射性炭素による年代測定の資料は得られていないが，遺跡の年代は紀元後 1000 年紀前半と推定されている（Лебединцев 1990: 162，菊池 2004: 33）。すなわちウイカ遺跡の年代は紀元後 1 ～ 5 世紀と推定されている。

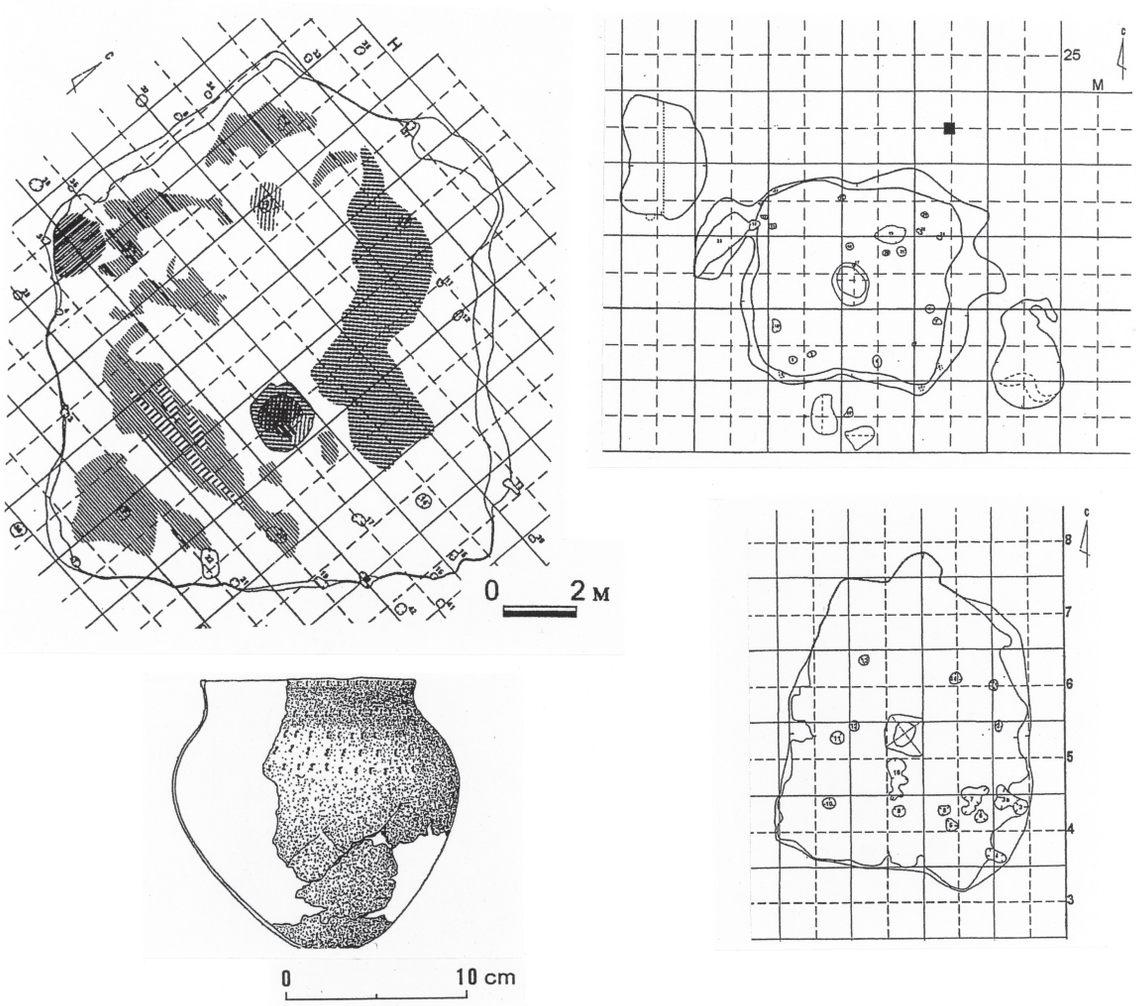

図６　カシュカレバグシュ２遺跡の住居址と土器（Василевский *et al.* 2005）

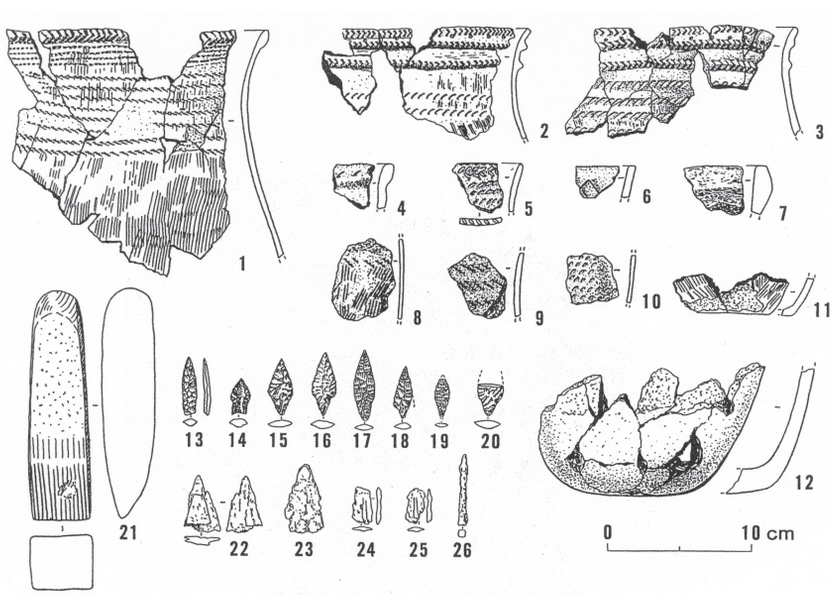

図７　クフトゥイⅦ遺跡出土の土器・石器・鉄製品（菊池 2004）

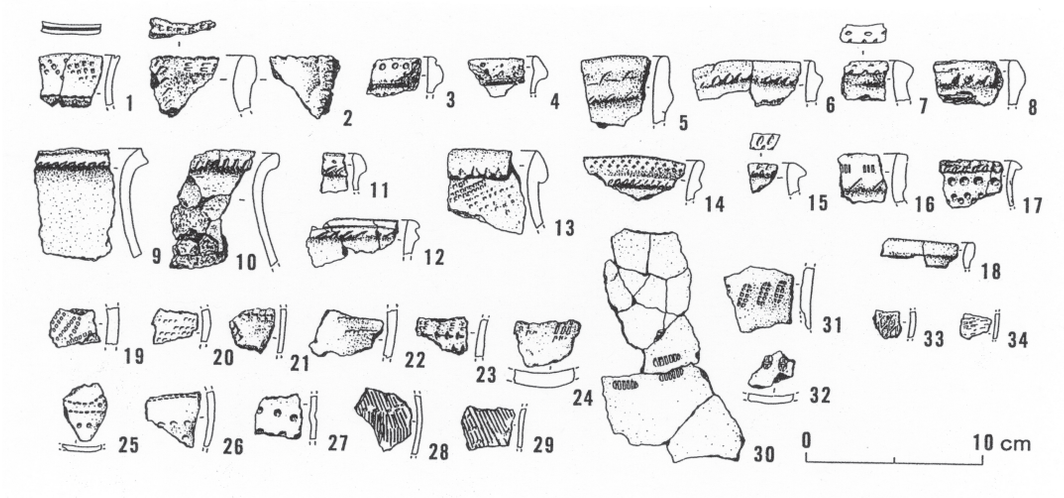

図 8 ウイカ遺跡出土の土器（菊池 2004）

3. オホーツク海北岸のトカレフ文化

オホーツク海北岸のオホーツク市からマガダン市にかけての沿岸部では 1970 年代末から 1980 年代にトカレフ文化の遺跡が調査されている（図 9 参照）（Лебединцев 1990: 27–130，菊池 1995: 389–392，菊池 2004: 19–20,25–26）。トカレフ文化の代表的な遺跡であるマガダン市の南西にあるスパーファリエフ遺跡から櫛目文の土器が出土している（図 10: 2 ～ 8）。

トカレフ文化の遺跡の年代は放射性炭素による年代測定によって，次の 16 例の年代が発表されている。オクサ I 遺跡は 2400 ± 200 年と 1950 ± 100 年によって，紀元前 1000 年紀後半と推定されている（Лебединцев 1990: 33）。トカレフ遺跡は 3540 ± 60 年, 2300 ± 100 年, 2170 ± 45 年によって，紀元前 2000 年紀中葉～前 1000 年紀と推定されている（Лебединцев 1990: 50）。シュコーリナヤ遺跡は 2425 ± 100 年と 2405 ± 100 年によって，紀元前 1000 年紀後半と推定されている（Лебединцев 1990: 52）。バタレイナヤ遺跡は 2640 ± 50 年によって，紀元前 1000 年紀中葉と推定されている（Лебединцев 1990: 63）。ナホトカ遺跡は 2400 ± 100 年と 2380 ± 100 年によって，紀元前 1000 年紀後半と推定されている（Лебединцев 1990: 66）。オリスカヤ遺跡は 2380 ± 30 年と 1830 ± 50 年によって，紀元前 1000 年紀末～後 1000 年紀初めと推定されている（Лебединцев 1990: 92）。スパーファリエフ遺跡は 2200 ± 470 年と 2060 ± 100 年によって，紀元前 1000 年紀末と推定されている（Лебединцев 1990: 123）。なお，ベリョーゾヴァヤ遺跡からは放射性炭素による年代測定によって，1390 ± 50 年と 1500 ± 40 年というデータが得られているが，これは後世の木炭が混入したものであろうと判断されて，遺跡の年代は推定によって紀元前 1000 年紀後半あるいは紀元前後と記載されている（Лебединцев 1990: 59–61,179）。

このようにトカレフ文化の遺跡の年代は放射性炭素による年代測定値に依拠して紀元前 2000 年紀中葉から 1000 年紀と推定された（Лебединцев 1990: 179）。すなわち約 3500 年前～ 2000 年前ということになる。ただしレベヂーンツェフの記述によれば，トカレフ遺跡の放射性炭素による年代測定値のひとつである 3540 ± 60 年という紀元前 2000 年紀中葉を示す測定値は最も古い年代を示すデータであるが，これを除くと，トカレフ文化の遺跡の他のデータはほぼ紀元前 1000 年紀に属しているという（Лебединцев 1990: 179）。すなわちトカレフ文化の遺跡の年代は 3000 ～ 2000 年前と推定されていた。

この点に関して，筆者はトカレフ文化の土器と骨角器はオホーツク文化の遺物に非常によく似ていることから，トカレフ文化の年代はもう少し新しく，約 2500 年～ 1500 年前と推定されること，またトカレフ文化とオホーツク文化は何らかの形で，相互に接触があった可能性が考えられることを指摘した（菊池 1995: 392）

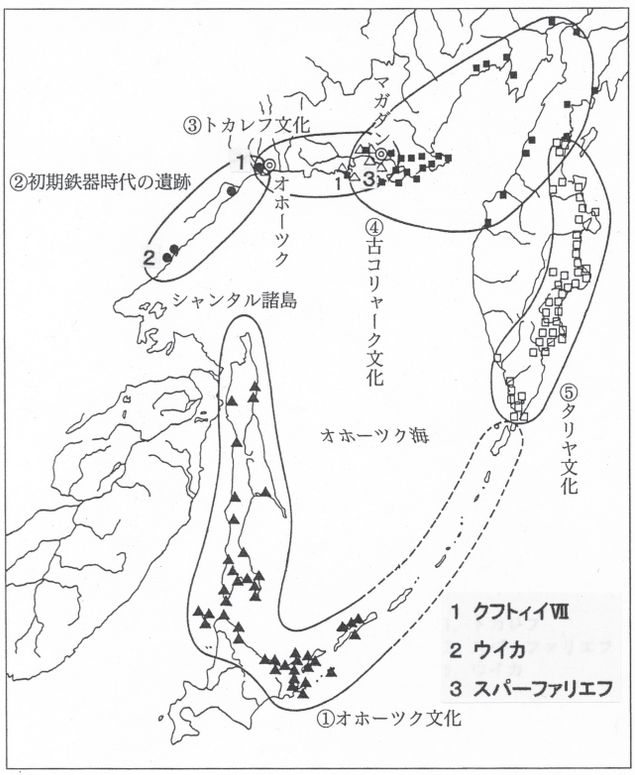

図 9　環オホーツク海の古代文化（菊池 2004）

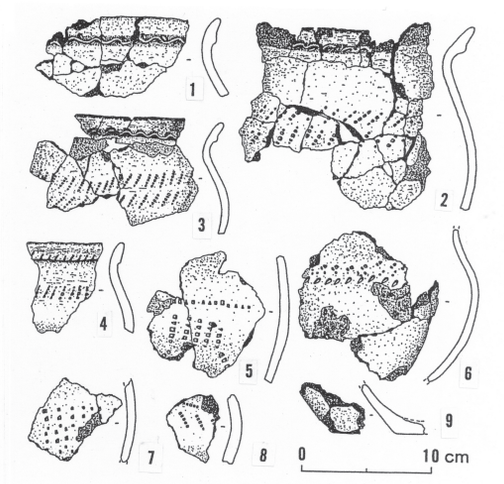

図 10　スパーファリエフ遺跡の土器（菊池 2004）

その後，トカレフ文化の遺跡の放射性炭素による年代測定値として，新たに 14 例が発表された。すなわちバタレイナヤ遺跡は 1780 ± 60 年，ベリョーゾヴァヤ遺跡は 2130 ± 50 年，ナホトカ遺跡は 2220 ± 60 年，オクサ I 遺跡は 2000 ± 60 年と 2100 ± 60 年の 2 例，オリスカヤ遺跡は 1800 ± 60 年，1950 ± 60 年，2110 ± 60 年，2160 ± 50 年，2250 ± 60 年の 5 例，スパーファリエフ遺跡は 1900 ± 40 年，2010 ± 60 年，2140 ± 60 年の 3 例，トカレフ遺跡は 2480 ± 50 年である。その結果，レベヂーンツェフは上記の合計 30 例の放射性炭素による年代測定のデータに依拠して，「トカレフ文化の年代の大部分は紀元前 7 世紀～後 2 世紀の範囲に収まっている」と修正した（Лебединцев 2002: 390）。

レベヂーンツェフはその後の論文においても，トカレフ文化の年代を紀元前 7 世紀～後 2 世紀と記載している（Лебединцев 2004: 370）。また最新の論文においても同様に，「（トカレフ文化の）年代測定のデータの大半は紀元前 7 世紀から紀元後 2 世紀の間におさまっている」と記述している（レベヂンツェフ 2012: 70）。レベヂーンツェフがトカレフ文化の上限を紀元前 7 世紀とする根拠はバタレイナヤ遺跡の 2640 ± 50 年のデータであり，下限を後 2 世紀とする根拠は同じバタレイナヤ遺跡の 1780 ± 60 年と，オリスカヤ遺跡の 1800 ± 60 年のデータである。

トカレフ文化の遺跡のうち，上述の櫛目文の土器が出土したスパーファリエフ遺跡の放射性炭素による年代測定値は 2200 ± 470 年，2140 ± 60 年，2060 ± 100 年，2010 ± 60 年，1900 ± 40 年である。したがって，これらのデータに依拠するならば，スパーファリエフ遺跡の年代はほぼ紀元前 3 世紀～後 1 世紀の範囲に収まる可能性がある。そのことはトカレフ文化の櫛目文土器の年代の一端が紀元前 3 ～後 1 世紀であることを示している。

オホーツク海北岸ではトカレフ文化を基盤にして古コリャーク文化（紀元後 5 世紀～ 17 世紀）が形成されたと考えられている（Лебединцев 1990: 179）。レベヂーンツェフはヴァシーリエフスキーによって提起された古コリャーク文化の 5 期の発展段階（Васильевский 1971: 133–137，菊池 1995:

393）を引用しながら，古コリャーク文化の第一段階のザヴィヤーロフ期（紀元後 5 ～ 8 世紀）はトカレフ文化を継承して形成されたとみなしている（Лебединцев 1990: 179, 226, 242，レベヂンツェフ 2012: 72–73）。またオホーツク海北西岸の初期鉄器時代の遺跡はトカレフ文化が南西に拡がったか，もしくはトカレフ文化の影響を受けて形成されたと考えられている（Лебединцев 1990: 241–242，菊池 2004: 71）。

4. オホーツク海北岸地域とサハリンの交通路

サハリン北部の初期鉄器時代のナビリ文化（紀元前 8 ～前 3 世紀）とピリトゥン文化（紀元前 10 ～前 4 世紀）の遺跡から出土した土器は櫛目文の文様を特徴としている。そのような櫛目文土器はサハリン中央部西岸の恵須取川河口の遺跡（図 5）や，サハリン南端部のアニワ湾沿岸の鈴谷（すずや）貝塚からも出土している（図 3: 19）。ヴァシレーフスキーによれば，これらの遺跡は縄目文の土器を特徴とするススヤ文化（紀元前 5 ～後 5 世紀）に属しているが，これらの遺跡から出土する櫛目文の土器はナビリ文化の文化的影響がサハリン南部に及んで出現したか，もしくはナビリ文化の人たちがサハリン南部に進出して生じたのであろうという（Василевский 2008: 180，菊池 2012: 61）。

ナビリ文化とピリトゥン文化の櫛目文土器の類例は，周辺地域では，オホーツク海北西岸の初期鉄器時代のウイカ遺跡（図 8）とクフトゥイⅦ遺跡（図 7）に，およびオホーツク海北岸のトカレフ文化のスパーファリエフ遺跡（図 10）に見出されている。ウイカ遺跡の年代は紀元後 1 ～ 5 世紀と推定されている。クフトゥイⅦ遺跡は紀元前 6 ～ 5 世紀と推定されている。スパーファリエフ遺跡は紀元前 3 ～後 1 世紀の範囲である。これらの遺跡の年代は必ずしも相互に対応していないが，それらがトカレフ文化の年代である紀元前 7 世紀～後 2 世紀の範囲にある点を考慮すれば，大きな相異を来たしていない。したがって，これらの遺跡の年代はサハリン北部のナビリ文化やピリトゥン文化の年代に対応しており，その点において，これらの櫛目文土器はサハリン北部とオホーツク海北西岸や北岸地域の人たちの交流によって発生したと考えることができる。

すなわちこれらの櫛目文土器はピリトゥン文化（紀元前 10 ～前 4 世紀）やナビリ文化（紀元前 8 ～前 3 世紀）の期間にサハリン北部とオホーツク海北岸地域の間に交通路があって，そこに両地域の人たちの接触と交流が展開されていたことを示していると考えられる。

レベヂーンツェフはオホーツク海北西岸と北岸の遺跡の櫛目文土器の起源について，「櫛目文はおそらくアムール河流域からオホーツク海沿岸に広まった」と推測している（Лебединцев 1990: 218）。しかしながら，そこではアムール河流域のどの地域の遺跡から櫛目文土器が出土しているのか，言及されていない。

かつて筆者はサハリンの櫛目文土器の類例として，アムール河下流域と沿海地方の遺跡から出土している櫛目文の土器に言及したことがある（菊池 1995: 9–10）。しかしながら，それらの出土例は断片的であり，どのような文化に属する土器であるかについて，まだ確定されていない。また近年では，アムール河下流域のウリル文化の遺跡から櫛目文の土器が断片的に出土している事例が報告されている（福田 2007: 182）。しかしながら，それらとサハリンの櫛目文土器との関連を明確に示すような資料は見出されていない（菊池 2012: 64）。

サハリン北部のナビリ文化とピリトゥン文化の櫛目文土器の起源については，まだ何も言及されていない。したがってアムール河下流域のウリル文化の櫛目文の土器，サハリン北部のナビリ文化とピリトゥン文化の櫛目文土器，オホーツク海北西岸の初期鉄器時代の遺跡の櫛目文の土器，オホーツク海北岸のトカレフ文化の櫛目文の土器の相互の関係はまだ明らかではない。

そうした中で，オホーツク海北西岸のクフトゥイⅦ遺跡とウイカ遺跡の櫛目文の土器とオホーツク海北岸のスパーファリエフ遺跡の櫛目文の土器は年代において近接しており，また前者の初期鉄器時代の遺跡と後者のトカレフ文化の遺跡は相互に密接な関係にあったことが知られている。またウイカ遺跡はサハリン北部と地理的に近接しており，サハリン北部からウイカ遺跡に至る沿岸の舟による交通は容易であったと推測される。このような地理的条件を背景に，サハリン北部のナビリ文化やピリ

トゥン文化の人たちとオホーツク海北西岸や北岸の人たちの接触を通して，そこに交通路が拓かれ，サハリン北部の櫛目文土器はオホーツク海北西岸や北岸に普及したのであろう。

おわりに

オホーツク海北西岸のウイカ遺跡はシャンタル諸島の北にあり，サハリン北端はシャンタル諸島の東にある。19 世紀初頭から中葉に，ニヴフ民族はサハリン北部からシャンタル諸島に近いセニェカ半島やトゥグル湾沿岸に居住していたことが知られている（菊池 2004: 68–69）。このようなニヴフ民族の広範囲な居住圏と交通路の確保は 19 世紀に発生したものではなく，古くからの歴史的経緯の上に得られたものであろう。

ウイカ遺跡から出土したイヌの装飾上腕骨はオホーツク文化の礼文島香深井 A 遺跡から出土したイヌの装飾上腕骨に類似している（菊池 2004: 32–34, 39）。この資料は初期鉄器時代のウイカ遺跡の人たちとオホーツク文化の人たちの間に何らかの関係があったことを示している。ウイカ遺跡の櫛目文の土器は，そのようなオホーツク海北西岸とサハリンの間に交通路が拓かれて，そこに展開された交流を通してサハリン北部からもたらされたものであろう。そしてそのような櫛目文の土器は，次いでオホーツク海北岸のスパーファリエフ遺跡にまでもたらされていたのであろう。

引用文献（五十音順）

菊池俊彦 (1995)『北東アジア古代文化の研究』，北海道大学図書刊行会，札幌

菊池俊彦 (2004)『環オホーツク海古代文化の研究』，北海道大学図書刊行会 , 札幌

菊池俊彦 (2012)「サハリン北部のナビリ文化とピリトゥン文化」，『北方島文化研究』10: 53–66

新岡武彦 (1940)「邦領樺太西海岸北部の遺跡調査概報」，『人類学雑誌』55(8): 18–37

新岡武彦 (1970)「旧邦領樺太先史土器論考」，『北海道考古学』6: 1–14

新岡武彦 (1977)『樺太・北海道の古文化 1』，北海道出版企画センター，札幌

福田正宏 (2007)『極東ロシアの先史文化と北海道―紀元前 1 千年紀の考古学―』，北海道出版企画センター，札幌

ヴァシレフスキー , A. A., V. A. グリシェンコ, V. D. フェドルチュク, A. V. モジャエフ〔木山克彦 訳〕(2009)「2003 ～ 2007 年におけるサハリン国立大学による考古学調査」，『北海道考古学』45: 45–58

レベヂンツェフ , A. I. [天野哲也・垣内あと訳］(2012)「オホーツク海をはさんだ南北両岸の海洋文化の関係」，『北海道考古学』48: 69-82

欧文文献

Василевский А. А. (2008) Глава 6 Ранний железный век на Сахалине и Курильских островах. Высоков М. С. (ред.) История Сахалина и Курильских островах. Южно-Сахалинск: 173–181.

Василевский А. А., В. А. Грищенко, П. В. Кашицын, В. Д. Федорчук (2005) Археологические исследования Сахалинского государственного университета (2002–2005 гг.). Ученые записки Сахалинского государственного университета, Сборник научных статей. Выпуск V, Южно-Сахалинск: 48–56.

Васильевский Р. С. (1971) Происхождение и древняя культура коряков. Новосибирск

Лебединцев А. И. (1990) Древние приморские культуры Северо-Западного Приохотья. Ленинград

Лебединцев А. И. (2002) К дискуссии о выделении токаревской культуры. II Диковские чтения : Материалы научн.-практич. конф., посвященной 70-летию Дальстроя. СВКНИИ ДВО РАН, Магадан: 388–393.

Лебединцев А. И. (2004) Северное Приохотье в эпоху палеометалла: происхождение и периодизация древних приморских культур. III Диковские чтения: Материалы научн.-практич. конф., посвященной 50-летию Магаданской области. СВКНИИ ДВО РАН, Магадан: 368–375.